

序

埋蔵文化財調査センター長

河野 芳輝

なぜ私たちは過去の世界が気になるのか。

考古学に近い学問に、化石を採集することから始まって最終的には生物や地球の進化を紐解いていく古生物学や、人類に関係した化石や遺物からその進化を調べる人類学という学問があります。これらは、いずれも「過去」の出来事の証拠となるものを集めることから研究が始まり、専門家のみならずアマチュアの役割が大きいことも共通した特徴です。

地球科学では、化石だけではなく過去に噴出した火山岩や過去に堆積した堆積岩など様々な岩石を採取し、その組成も調べます。さらに、それらが何千万年という気の遠くなるような長い時間の変形した様子も調べます。それらを元に地球や日本列島がたどってきた歴史物語を綴ることができ、さらには長期的な地球環境変動の予測も議論できるようになるのです。なお、このとき欠かせないことはそれぞれの事件が起きた年代を如何に知るかということです。このために化石が重要な役割を果たしてきましたが、もちろん現代では、放射性同位体年代決定法を含む複数の方法で年代をチェックすることが研究の信頼度と精度を上げるために欠かせません。このことは昨年秋に生じた事件を見ると考古学の世界でも同様でしょう。

私の研究にもっと身近な「地震」研究の世界でも、過去の地震を、それも地震計が発明されるよりかはるか昔に起きた地震の震源やその発生日時・規模を調べる研究が明治時代から行なわれてきました。これを「歴史地震学」とか「考古地震学」と呼んでいます。この研究を行なうには古文書や遺跡の資料しか使えるものはありません。

1995年兵庫県南部地震以来よく知られるようになった「活断層」も、それが動いた年代がわからなければ防災上あまり意味がありません。ある断層に土器のかけらが挟まれていたとすると、それはその断層が動いた時期(すなわち地震が発生した時)を化石として残したことになります。また、地盤の

液状化の証拠が遺跡と一緒に出てくることもあります。これらの事件がおきた時代を調べるのに考古学の手法が活躍します。このようにして過去の地震を調べることで、これまでどこでどのような地震が起きてきたかがわかるので、いつかは起きる地震の予知に大いに役に立つと考えられています。

東海地方で問題にされている「東海沖地震」説なども、このような昔の資料を通してこの地方を100年くらいの間隔で繰り返し大地震が襲ってきていたことがわかった結果、次の大地震も近いのではないかという事になりました。決して最新式の観測で予想されたものではありません。

重要なことは、このような結論に至るまでに役に立った資料は、必ずしも一見して価値があるように見えるものばかりではないということです。ミロのビーナスのような遺物は芸術的にもそれ1個だけで価値があることがわかりますが、先の例のような研究に役立った資料は個人的な日記であったり、まさに割れた茶碗であったりするのです。ですから、発掘された資料がどのような価値を持つかは見かけでは決まらないものだとすることを理解しておく必要があります。また、「見れども見えず」の言葉があるとおり、資料が包含している価値を呼び出すには読み手の観点が強く関係してきます。地震についての関心があれば、遺物・遺跡から過去の地震の証拠を読み出すことはできません。

埋蔵文化財調査センターはこのような過去から未来を探る調査研究の第一線にあってその責任を果たしてきました。金沢大学の敷地が調査対象という条件があるためそこから華々しい考古学上の発見を望むことは難しいと思いますが、大学人や市民の心を過去から未来へいざなう役割の一端をこれからも果たして行ってほしいものと願っています。